

－第 5 章－

配慮を必要とする子どもへの技術

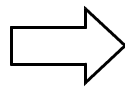
本章は特別支援教育の視点から、うまく集団になじめない子どもや教師の指示が通りにくい子どもへ、どのような支援を行うのかについて紹介します。

教師の話が伝わらなかったり、ささいなことで友達とトラブルになったりする子どもへは、どのような配慮で指導すればよいのでしょうか？ここでは、配慮を必要とする子どもたちへの指導する技術を紹介します。

授業で気になる子どもの姿

子どもたちの思い

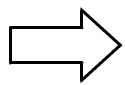
グループ学習で話し合いへ参加しようとしな



友だちが話していることが分からない。
僕の話聞いてくれない。



学習活動を提示しても、始めない



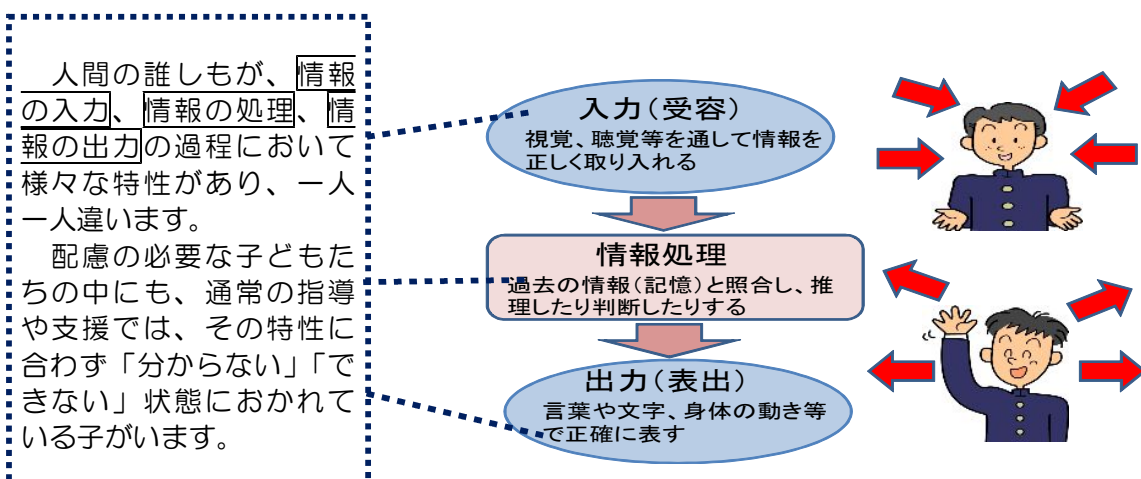
難しい問題だし、
何をしたらよいか分からない
やりたくないな！



実は、普段、教師が気になる子どもたちは、周りの子どもたちも「ふざけている」「怠けている」「努力が足りない」「変わった子ども」などと誤解されたり、理解されにくかったりすることがあります。そんな子どもの姿を、教師側から「困った子」ではなく、子ども側から「困っている子」に見方を変えることが大切です。

1 「困った子」でなく、「困っている子」に見方を変えてみましょう


「困っている子」いわゆる配慮の必要な子どもは、視覚や聴覚などから入ってくる情報をうまく処理できないことが多く、混乱していることが考えられます。



このことから、学習場面では例えば、次のような困難さを感じる場合があります。

第5章 配慮を必要とする子どもへの技術

「見る」

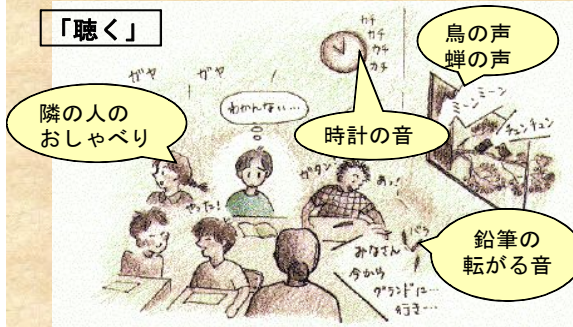


きりん → いびき
し → ー ー
形 → 研 L D教室 → L D教室
ぬーめーあ きーさ
響き 音の音 耳立 鉛筆

例えば授業もこのように重なって見えたり聞いたりします。これでは何が正しいか分からない、文字は意味のあるような形なのか分からないです。

何を見たら良いかわからない

「聴く」



周りの音が、同じ強さで入ってくる

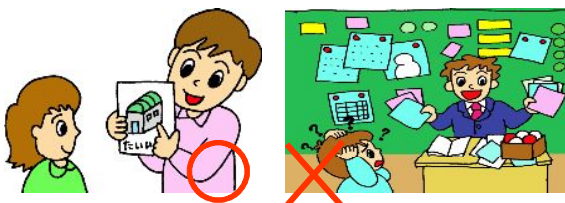
上記のような「見る」「聞く」の学習場面において、その情報を選択し、取り入れること、取り入れた情報を整理すること、あいまいな状況に臨機応変に対処することが苦手です。また一方で、ある感覚に対し過度に敏感であったり、鈍感であったりします。そのため、周囲の状況とその変化に混乱してしまうことも少なくありません。その子の最適な状況や方法で、その子の「学び」を保障しましょう。

そこで、三つのキーワード「シンプル・クリア・ビジュアル」で環境を整えながら支援をします。

2 支援の基本 「シンプル・クリア・ビジュアル」

「シンプル・クリア・ビジュアル」とは、余分な刺激を減らすこと、簡潔に指示すること、情報を視覚的に提示することを表しています。

シンプル



余分な刺激を減らし、伝えたい情報や指示に絞って示す。

【例】 指示は大事なことに限定して示す。
言葉の指示を整理して伝える。
活動する場所には不要なものはない。

クリア



活動の順序、方向、内容を明確に、具体的に示す。

【例】 事前に活動内容や順序を示す。
スケジュールや手順は固定化する。

ビジュアル



情報を視覚的に提示し、見て分かるようにする。

【例】 活動の場所を分けて、一場所一活動を原則とする。
指示は文字や絵、図を使って説明する。
チェック表等を用いて、することを示す。

3 環境整備での支援

- 配慮の必要な子どもは、環境や状況に大きな影響を受けます。具体的な支援は、黒板、席周辺の整理、机や椅子の位置を揃えるためのラインや印、ロッカーや引き出しを整頓する写真や絵カードの活用などが挙げられます。



余分な刺激がある状態



余分な刺激をなくした状態

黒板の周りは、必要な掲示のみとし、最小限にします。掲示物は必要な時に貼り、板書が際立つようにします。



道具がかかっている状態



道具がかかっていない状態

机の並び方を揃えると活動しやすく落ち着いて学習できます。また、机の横にカバン等を下げません。動線を確保し、子どもの支援を容易にするためです。



置き場所を明確にする目印



教具の収容棚

机や収納棚を整理することで、関心を授業に向けることができます。



位置の確認テープ



課題順の整理かご



靴を置く場所カード

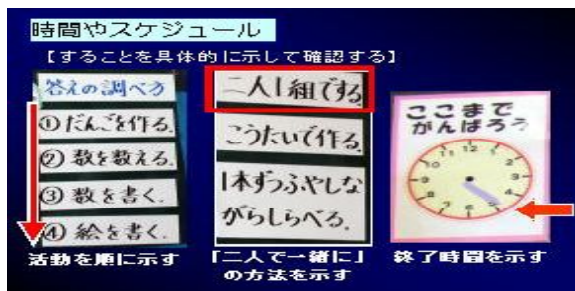
生活や学習の見通しが持てず、不安定な子どもたちには「何を」「どのように」「どの程度」行うかを具体的に提示することが大切です。このことで、混乱しないだけでなく、主体的に活動を促すことができます。

4 学習具・掲示物における支援

(1) 見通しをもてるようにしよう

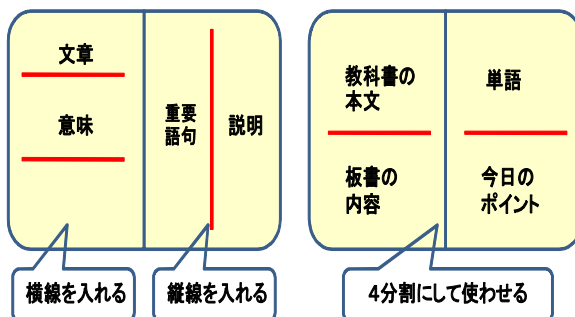
学習の内容や学習時間が分からないことが子どもの不安定さを引き起こしています。

いつまでに、何をするのかを具体的に示すことで、子どもたちは落ち着いて行動させられます。

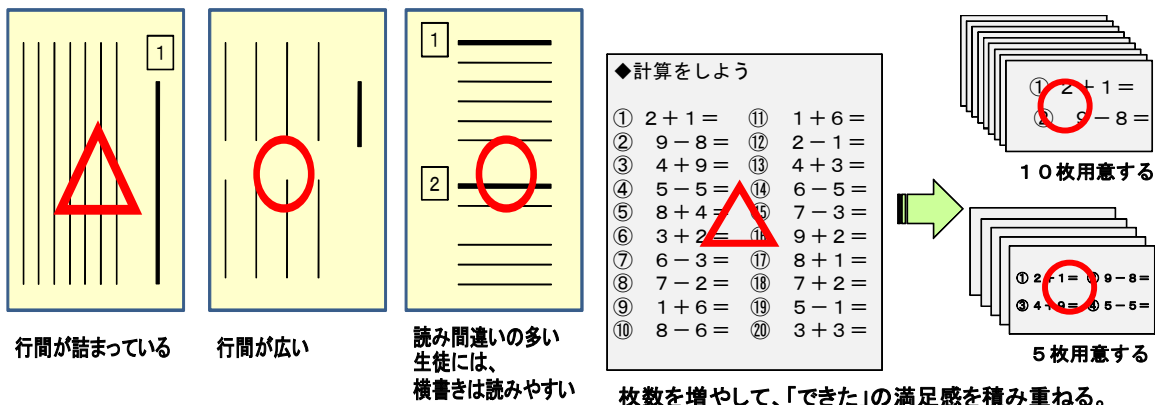


(2) ノートは仕切って使う

どこに何を書くのかを明確にするため、ノートを仕切るなど、ノートの取り方も分かりやすく指示します。学習内容等に応じて、一番適したノートを選択し、使用させます。

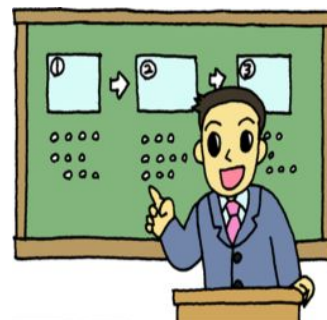


(3) 子どもの実態に応じた学習プリントを作成する



5 かかわるときの支援

○ ニュース番組の構成と授業は相手に分かりやすく伝える点で共通です。ここに支援のヒントがあります。多くのニュース番組では、番組の「型や枠組み」が決まっています。そのため、視聴者は一定の流れを想定して「次は、スポーツだな」と見通しをもってテレビを視聴できます。視聴者はこのパターンに安心します。授業も同じで、指導過程を一定させると、子どもたちの気持ちや行動を安定させます。教科別に授業の型をつくり、それを繰り返すことで、子どもたちは期待感と見通しをもちやすくなります。



- 机間指導の目的の一つは、子どもの形成的評価で子どもの理解度を授業の途中で評価し、授業進行にフィードバックできるのです。加えて、子どものつまずきに気付き、個別指導する貴重な機会を設定できます。机間指導により賞賛や丸付けによる評価を実施しましょう。

さらに、正面あるいは後ろから立ったままでもよいので、頭をくっつける等スキンシップを深めたり、多くの子どもに接するように座席位置の配慮や机間の回り方を工夫したりします。

- 授業では、空書き、指書き、教科書へのアンダーライン引き等の「動きや作業」を取り入れ、子どもの集中力を高めます。また、音読する時に、列ごと、班ごとに立ち上がって読むなど「立つ、座る」動作を入れると学習へ集中する効果があります。



- 子どもが一人でノートに書くときや何かの作業をしているときの、教師の指示は避けたい光景です。「書きながら、説明を聞く」の二つの作業は、大人でも大変です。今、すべきことに集中できる状況をつくることを心掛け、必要な追加説明や次の作業課題は、いったん区切ってから伝えます。特に子どもの書字には注意を払い、書く時間をしっかり確保します。また、書くのに時間がかかる子、何度も黒板を見て書いている子など、書字の困難な子どもに気付き、支援のきっかけをつくりたいものです。

- 私たちは「あっち・こっち」「たくさん」「あと少し」「だいたい」「ちゃんと」等、多用する言葉があります。しかし、目的や終点、量や回数が不明確で正解がいくつもあるような言葉は、子どもたちに混乱を招きます。

「時計の針が○まで」「あと○個」「あと○回やろう」と具体的な指示を心掛けると、子どもたちが見通しをもちやすくなります。



- 私たちは日常生活で、禁止や否定の表現を使っています。「廊下を走らない」ではなく「廊下は歩こう」等の肯定的な前向きな表現を心掛けたいものです。禁止や否定の言葉は、お互いの気持ちをいらだたせてしまいます。子どもが、ふっと前向きになる肯定的な言語環境は分かりやすいだけでなく、人の心を優しくします。

- 話す際に、声の大きさ、抑揚、スピードなどを変化させることは、強調したいことを的確に子どもに伝えるために是非留意したいことです。また「では、大事なことを言います。」と言ってから、適度な間をとって話し始める方法も効果的です。

絶妙な間や話の流れは、自然と子どもたちの関心を話に集中させます。

